

唯物論研究協会テーマ別分科会「文化研究の両義性」

「フェミニズム理論のネオリベラリズム/ポスト植民地主義批判 ナンシー・フレイザーのフェミニズム批判から」

20151018

菊地夏野 kikuchi@hum.nagoya-cu.ac.jp

1 フェミニズムにとっての「文化研究の両義性」

フェミニズムの視点から「文化研究」:

「文化」は常に中心的な位置

近代初期において女性運動の大きな課題となったのは、法的な平等、政治的な平等の達成

同時に労働や資本主義などの大きな問題に対して取り組むフェミニズムも存在

フェミニズムは相異なり対立も含む思潮が、「女性」の名の下に渾然一体となって集合して構成されている

フェミニズムにとって「文化」的なジェンダーに関わる差別や暴力を批判することの必要性和、それが常に「文化主義」と化してしまう危険性=文化研究の両義性

本報告の関心: 現代社会を「ネオリベラリズム」批判という観点から分析するときのフェミニズム理論に必要な問題設定を明らかにする

2 日本の女性学の中から

「特集・80年代フェミニズムを総括する——日本女性学研究会1月例会より——」『女性学年報』第12号1991年 上野千鶴子、江原由美子、大越愛子、織田元子

・商業主義フェミニズムへの懸念: 受け手の拡大と与え手の偏り

・フェミニズムの分離主義と普遍主義

・「マルフェミ」と「文化派」、「上部構造対下部構造」

→フェミニズムの「文化主義」という問題 「単なる文化の問題」という外部からの視線 日本人女性中心主義・階級主義という内部からの批判

3 フレイザーとバトラーの論争

1) Fraser, Nancy, 1997, *Justice Interruptus: Critical Reflections on the "Postsocialist" Condition*, Routledge. (=2003, 仲正昌樹監訳『中断された正義』御茶の水書房.)

フレイザーは現在の政治状況を「承認を求める闘争」の新しい興隆に対して「搾取」「再分配」を問題にする社会主義の失墜として対比的に把握＝「承認」のパラダイム vs 「再分配」にもとづくパラダイム→ふたつのパラダイム双方に関わる問題としてジェンダーと「人種」に焦点を当て、今日の「正義」は再分配と承認の両方を必要とする主張。

2) Butler Judith, 1998, "Merely Cultural", *New Left Review*, 227. (=1999, 大脇美智子訳「単に文化的な」『批評空間』第Ⅱ期第23号.)

バトラーは、フレイザーが文化と経済を恣意的に区分していると反論。レズビアンやゲイたちの闘いを文化的承認の問題として理解することに反対し、それをむしろ政治経済作用の核心に迫るものとして再解釈しようとする。セクシュアリティの闘いは経済の領域そのものを物質の再生産だけではなく人間の社会的再生産を含むものとして再定義させる闘いとして考えるのである。同時に、「統一を目指さない抵抗の政治」を提起することで左翼とポスト構造主義との連携をつくらうとしている。

3) Fraser, Nancy, 1998, *Heterosexism, Misrecognition, and Capitalism: A Response to Judith Butler*, *New Left Review*, vol.228. (=1999,大脇美智子訳「ヘテロセクシズム, 誤認, そして資本主義 ジュディス・バトラーへの返答」『批評空間』第2期第23号.)

最も重要な相違点は、「再生や統合のプロジェクトを、では具体的にはどのように実現していくかという問題」(241)とする。異性愛規範的なセクシュアリティ規制は、資本主義社会における社会的分業や労働の搾取の様式を構造づけていないから経済構造の一部ではない。同性愛者たちの経済的不利益は、承認関係の中のヘテロセクシズムの結果である。「経済/文化」の区分は近代資本主義に特徴的なものとして歴史化されなければならない。

問題

バトラーの反論のように上部構造対下部構造という区分は「時代遅れ」ではあるし、「左翼の分裂」をよびこむ恐れがあるものの、フレイザーの指摘は当時のフェミニズムの社会的位置への違和感を浮き彫りにしている

◎セクシュアル・マイノリティの運動の意味、評価 資本主義と異性愛中心主義の関係
フェミニズムは経済と文化の両方に関わっているという前提で、同性愛者の運動の位置づけがひとつの争点

竹村：異性愛的セクシュアリティの脱構築が資本主義に対する変革の可能性を秘めている

4 ネオリベラリズムにおけるジェンダー分析

Fraser, Nancy, "From Discipline to Flexibilization? Rereading Foucault in the Shadow of Globalization" *Constellations* Vol. 10, No. 2, 2003=高橋明史訳「規律訓練からフレキシビリティ化へ?」『現代思想 総特集フーコー』2003年12月臨時増刊

フォーディズム的規律の権力配置の特徴：1 社会の全体化 2 国民国家の枠内における社会的な集中 3 主体の自己統御

ポスト・フォーディズム的統治性の特徴：1 グローバル化された多層的システム 2 「(ナショナルかつ) 社会的なもの」の解体 3 自己統御の衰退と暴力的抑圧の回帰

Nancy Fraser, 'Feminism, Capitalism and the Cunning of History', *New Left Review* 2:56 March/April 2009=関口すみ子訳「フェミニズム、資本主義、歴史の狡猾さ」『法学志林』第109巻第1号、2011年。

・第2波フェミニズムの軌跡を、最近の資本主義の歴史との関係で位置づける

国家により組織された資本主義社会に蔓延した男性中心主義への根源的挑戦

ネオリベラリズムという新たな資本主義の段階に、第2波フェミニズムが鍵となる成分を提供したのではないか

・「フェミニズムの理想の一部と、勃興する資本主義の新形態——ポストフォーディズムの、『まとまりのない』、トランスナショナルなそれ——の要求とのおぞましい収斂」27-28

・フェミニズムの理想は文化的には成功、制度的には失敗という命題⇒第二派フェミニズムによって始まった文化的変化は、それ自体としては有益なものだとしても、公正な社会のフェミニスト版と真っ向から対立する、資本主義社会の構造的変化を正当化するのに一役買った可能性を曖昧化してしまう

第2波フェミニズムの意義は、分析上異なるジェンダー不公正の3つの次元、すなわち、経済・文化・政治という3つの次元を編みあわせたこと

第1段階 第2波フェミニズムの批判を、公正への3つの視角「再配分・承認・代表」を統合する配慮として再構築

第1世界における福祉国家、戦後期の元植民地の開発途上国

国家組織型資本主義の政治文化の特徴 ①経済主義 ②男性中心主義 ③国家管理主義 ④ウェストファリアリズム

①公正の一元的・経済主義的見方を、経済・政治・文化を含む三次元的理解と置き換えた

②社会主義フェミニストは運動内部の男性中心主義を批判すると同時に、国家組織型資本主義の男性中心主義の核、ジェンダー分業の変革を目指した

③国家組織型資本主義の官僚的・管理者的エトスを拒否すると同時に、国家組織にフェミニスト価値を注入することを目指した

④理論のレベルで批判したとしても、実践のレベルで再び持ち出す傾向があった

=第2波フェミニズムは、国家組織型資本主義の経済主義・男性中心主義・国家管理主義を拒否したとしても、相反的にウェストファリア的であり続けた

「後でわかったように、そのプロジェクトは大きくは死産に終わり、当時はよく理解されていなかったより深い歴史的力の犠牲となった。振り返ってみると、第二波フェミニズムの登場は、資本主義の性格の歴史的変化、すなわち、すでに見てきたような、国家組織型からネオリベラリズムへの変化とときを同じくしていた」(38)

「第二波フェミニズムとネオリベラリズムが並んで栄えたのは単に偶然だったのだろうか。それとも、そこには、あいにくの、密かな親和性があったのだろうか」(39)

ネオリベラリズムが再意味化したフェミニズムの4つの理想

①文化批判を絶対化し、アイデンティティ・ポリティクスの一変種へ変化

②第2波フェミニズムの家族賃金批判は、フレキシブルな資本主義に、より高い意味やモラル上の得点を提供するロマンスのかなりの部分を提供している

③国家権力を、市民のエンパワーメントと社会的公正を実現する機関として作りかえようという当初の展望は、今や、市場化と国家の削減のために使われている

④公正の範囲を国民国家の外に広げようとした試みは、資本主義の新形態の行政的需要とぴったりと符合するものとなった

「国家組織型資本主義の時代には疑いもなく解放的であった、経済主義・男性中心主義・国家管理主義・ウェストファリアリズムへの批判は、今や、曖昧さに満ちあふれ、資本主義の新形態の正当化需要に役立ちやすいものとなっている」(45)

現在はネオリベラリズムの終焉の始まり？

フェミニズムとネオリベラリズムが分岐する市場に媒介されたジェンダー従属を批判の大きな焦点としなければならない

フェミニストのポストネオリベラル批判の4つの焦点

①不公正の三次元の解釈(再配分・承認・代表)を統合する

②ケア労働をはじめとする商品化されていない活動の価格設定をするようなライフをめざす

③公権力を強化し、市民のエンパワメントを目指す

④他の進歩勢力と手を組んで、ポストウェストファリアの政治秩序をめざす

問題

◎フェミニズムの評価、意味

○フェミニズムの「ウェストファリアリズム」の問題が十分掘り下げられていない フェミニズムと植民地主義の問題 バトラー、フレイザーともに不足しているのではないか

5 ポスト・フェミニズム

フェミニズムの一部がネオリベラリズムに篡奪されたとして、ネオリベラリズム下でのジェンダーとセクシュアリティの秩序はどのように展開しているか

ポストフェミニズム論

Angela Mrobbie, "The aftermath of feminism" SAGE 2009

・「今より早い 70-80 年代の時期にフェミニストの活動や運動が勝ち取ったかのように見える成果に対するバックラッシュとは異なる、ある新しい種類の反フェミニスト的感情によって特徴づけられる状況という意味でポストフェミニズムと呼ばれうる社会的文化的風景」

・フェミニズムの要素はもっと個人主義的な言説に変換され、それらはとくにメディアやポピュラー文化だけに止まらず国家のエージェンシーによって、フェミニズムの代替物として新しい見かけで展開

・確かに、あるレベルでは、これは、多くが文化レベルで行われる活発な悪口と否定を通じてなされ、それによって若い女性たちにとってフェミニズムはかなり不快なものとなった

ネオリベラリズム下でジェンダー・セクシュアリティは以前と異なる新しい秩序を形成している

→フレイザーにとってフェミニズムは「ネオリベラリズムに還元された」、マクロビーにとってフェミニズムは「若い女性たちに嫌悪されるおぞましい幽霊」となった

ネオリベラリズム下でのフェミニズムの両義性？

フェミニズム研究内での現状把握の混乱？

一方日本国内ではほとんど議論不足：第2波フェミニスト世代との状況把握の乖離

6 LGBT とフェミニズム

加藤泰史「フレイザーとバトラーの『再分配/承認』論争」越智博美・河野真太郎編『ジェンダーにおける「承認」と「再分配』』彩流社 2015

企業の LGBT 対応策は、「少なくとも生産性向上のためであるならば、現代の企業にとって異性愛（中心）主義は必要不可欠というわけではないことを示唆している。」「仮にこの『非異性愛的』社会運動が定着して言語的に分節化したとしても、直ちに資本主義を変革できるかどうかは疑問」(61)としてフレイザーを支持

企業の LGBT フレンドリー施策と経済構造の異性愛主義との距離

「非異性愛的社会運動」内の分岐に注目する必要＝クィア・スタディーズの中心的論点

「異性愛的セクシュアリティの脱構築」という問題は、単なるマイノリティへの「寛容」(ウエンディ・ブラウン)を意味するのではなく、ジェンダー不平等な社会制度およびそれにもとづいた経済

構造の変革を意味しているということ

その意味で、LGBT 運動の目標が「同性婚」実現であるかのように認知されがちな傾向は、運動の意義を矮小化する危険

7 最後に

バトラーとフレイザーの論争の限界は、同性愛者の運動を異性愛主義への闘いと同等に見なしていたこと。同性愛者の運動はそれのみでは「アイデンティティ・ポリティクス」にしかならず（フレイザーの批判した分離主義）、フェミニズムと結びついたときに異性愛主義への変革可能性をもつクィアの運動内の分岐を理解するためにやはりフレイザーのようにフェミニズム論に戻る必要がある

フレイザーの論は日本のフェミニズムの現状に対する説明としても可能

→フェミニズムがなぜネオリベリズムに篡奪されたのかという問い

資本主義の展開による「女性の地位の向上」「社会進出」（労働力および購買力としての女性）とフェミニズムの進展が混同されていないか ex バブル期のフェミニズム

→「ポストウエストファリアリズム」すなわちフェミニズムの（ポスト）植民地主義からの未脱却に原因があるのではないか：文化・知あるいは経済構造の植民地主義性を十分に問わないフェミニズムの傾向

国内のジェンダー研究）文化的領域について研究するさいに資本を批判するアプローチが少ないことが問題点 「フェミニズムの商業主義」という問題設定

・「女子力」現象 フェミニズムのアイデンティティ・ポリティクス化

フェミニズムの内部批判と変革の必要